

特116

695

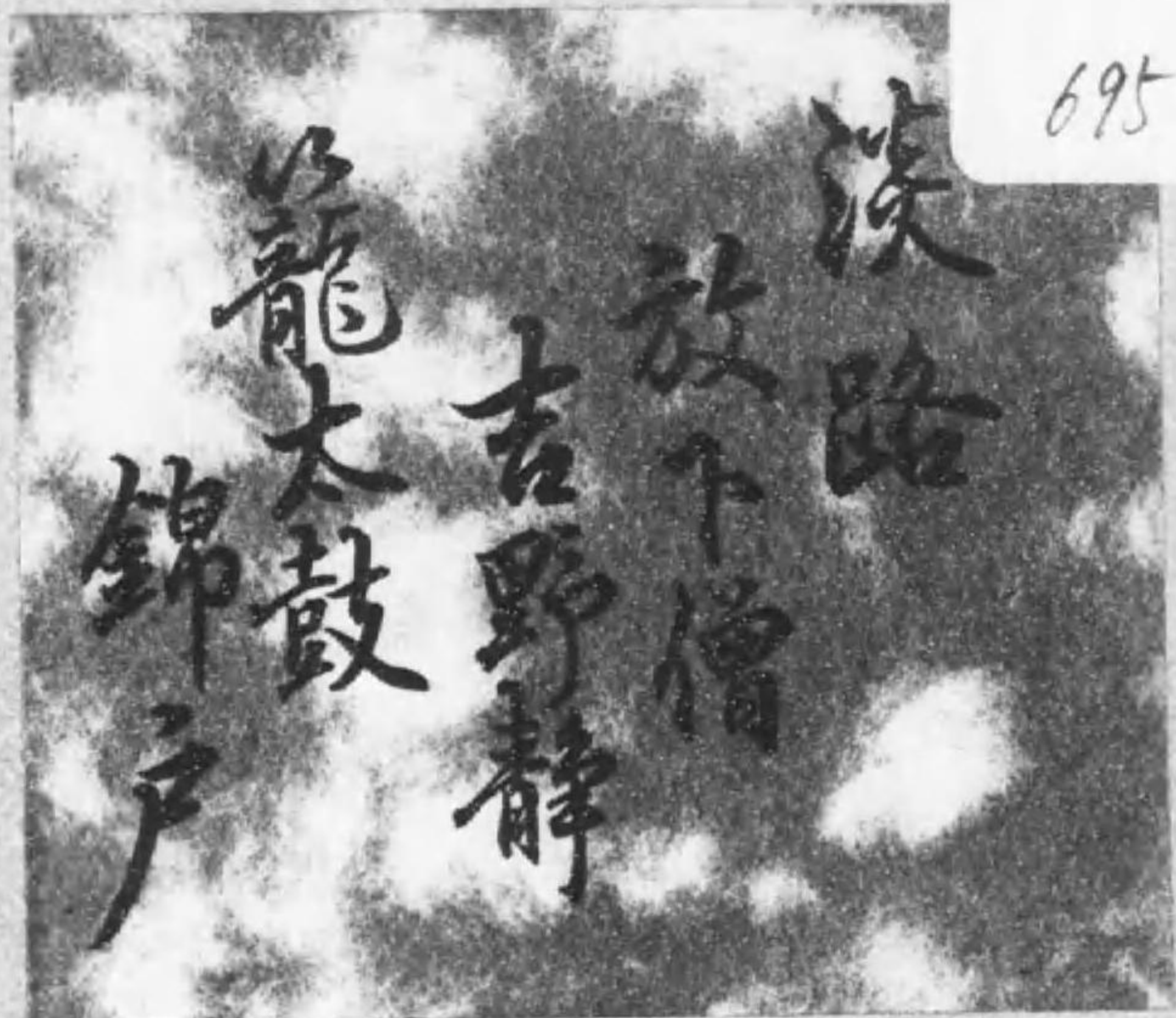


始



特116

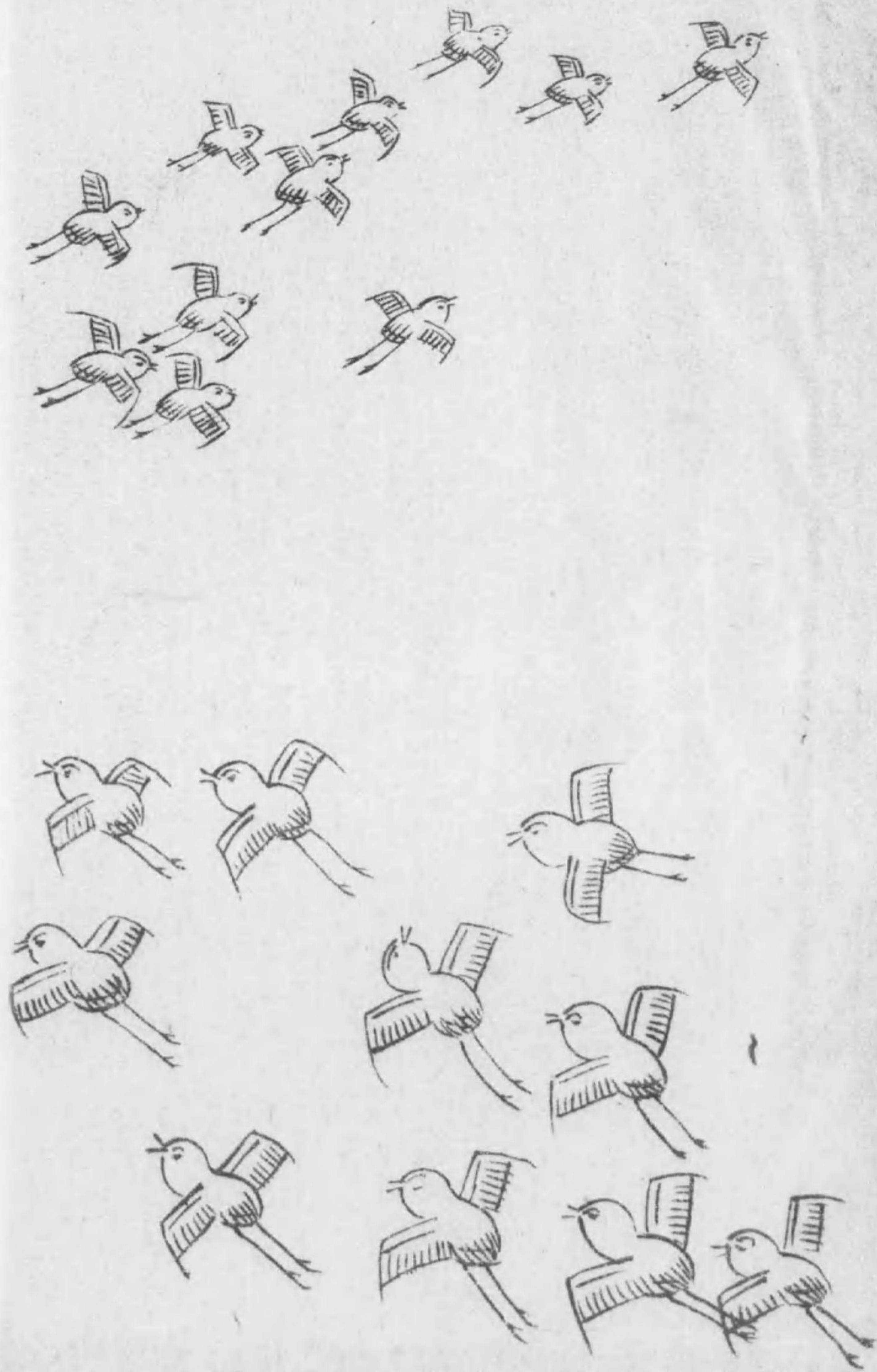
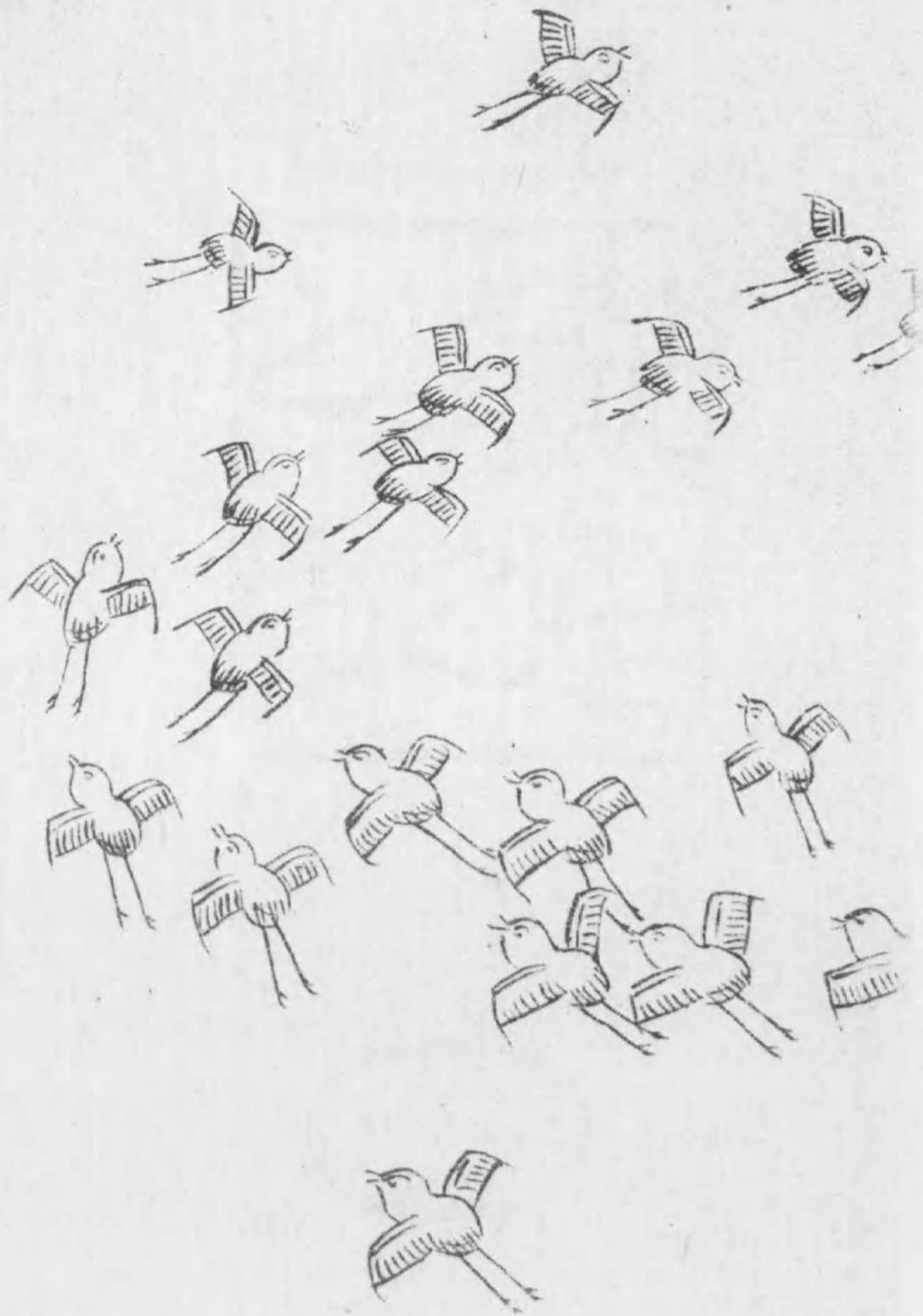
695



觀世流改訂謄本

別一





物116
695



清觀
之世

大正
11. 2. 24
内交

文學博士

明治四十年

井上頼國 本 文 監 修

丸岡清之節 附 訂 正

大正五年

山崎樂堂 附 訂 正
觀世流訂本刊行會 附 樣 式 一

大正十年
山崎樂堂 拍子附再訂正

淡路

解題

謡ひ方梗概

淡路二の宮の神徳と賞たる曲なり。別名と淡路島、又標葉一様、駒鶴葉とも書くとも回ふ。其一節は古く五音三四集にも引用せられ、光悦本の曲身にも入れられたれど、古記に全曲に就きての記録無し。二百十番謡目録に世阿弥作、能作片島注文に作者不明とあり。

の定まる所なれば慢重に出で、大きやかに確りと許なるべく、サシは少くさらりめに、下段にて後め、上段は揚びくくと長閑なる趣に流ふ。ワキとの向答は十々に位を保ちて落局好く承け應へ、ツレとの連吟を懐きこやかに確りと扱ひ、事新しき云々より聊か位をす、め、ツレとの向答は喉次に寄せて御覽せよと確りと謡ひ地に流す。サシ以下は指運び有れども猶確りとしたる心を失ふ事なく、上端は引き立て、大きく、ロンギは地と一つにむらぬやう聊か持に謡ひ運びの転る事あるべからず。後には威有りて大きく、瑞氣湧ちたる態なるべき中にも密のサシは確りと勢よく朗らかに謡ひ、流まるやより一聲の調子に更へて豊かに出づ。地との向答はさらさら、ツレは確りと勢よく朗らかに謡ひ、流まるやより一語とあるべく、ロンギは剛性に雄大なるべし。

ツレはツレの位を保ちつ、而も氣高く、春の心と宜しとす。ワキの向答など位はシテに譲るべきも輕々しく扱はす。地は上段、後を時き云々にて調子よく、や、運んで強々と流ふ。ツレは後めて高めに去で、節を大らかに運び好く、サシ以下すらくと、クセは確りとしたる味はふにてさらりと扱ひ、字音の角立たぬやう心す。ロンギは氣を新いて来り氣味に承け渡り、弛みなく流し進みて中入となる。後七つ五つの神の代のはシテの氣を承けて降け、和光守護神のより来つて寛りと、ロンギ以下力ありて雄大なるべく、晴れやかに謡ひ續けてキリに入り、泰平を延敷する心もて流し納む。

辭解

流まる國の云々

流まるる我國の草創は、淡路の國を初とすとの意と、淡路に新は凡餘り後ハ初、第一に淡路島を生み流りといふ故事に基、當代今上 任吉 根津國東成郡住吉、淡路は南海道の一國にして、瀬戸内海東端の島、當今 任吉 根津國東成郡住吉、古來和歌の護神とせられし神、玉津島 任吉 根津國海軍郡和歌村の南方姉背山なる玉津島神社をさす。伊弉諾尊の御子とせられし神、玉津島 任吉 根津國海軍郡和歌村の南方姉背山なる玉津島神社をさす。任吉の神と共に和歌の護神とせられし神、後に伊

淡路

神皇正統記の種を蒔き、**紀の海** 紀伊の海、以下 波吹上の云、浦風波を吹き上ぐといふと吹上の

と、いへる様に去す。**沖つ舟** 沖の舟、よそに霞み、云、速く霞みて島影陰かり

山市の西南推賢村附近の古木、夫木抄、**波の淡路** 波の泡と云ひかけ、更に東種を收め、國

に、白波を吹上の波と見ゆるかな云々、**種を收め、國** 神の生み成り、神の生み成り、神の生み成り

波の淡路、波の泡と云ひかけ、更に東種を收め、國、**種を收め、國** 神の生み成り、神の生み成り

附近の海、**波の淡路** 波の泡と云ひかけ、更に東種を收め、國、**種を收め、國** 神の生み成り

為したる國なれば、苗代へせき入り、水も流ち、**陰陽の神代** 陰は女性、陽は男性、伊弉諾(陽神)

足らひたりとまづ神徳を賞ふ、苗代は縮の苗、**陰陽の神代** 陰は女性、陽は男性、伊弉諾(陽神)

人界の世、**山河草木** 作物は二神の恵心によりて創造せられたりといふを作り田にかく、

とのたまへる、**あめつちくれを** 神の恵心が田に注ぐ雨の如く、**千里万里** 今、チサトパンリ

と見えゆ、**あめつちくれを** 神の恵心が田に注ぐ雨の如く、**千里万里** 今、チサトパンリ

と見えゆ、**あめつちくれを** 神の恵心が田に注ぐ雨の如く、**千里万里** 今、チサトパンリ

と見えゆ、**あめつちくれを** 神の恵心が田に注ぐ雨の如く、**千里万里** 今、チサトパンリ

と見えゆ、**あめつちくれを** 神の恵心が田に注ぐ雨の如く、**千里万里** 今、チサトパンリ

と見えゆ、**あめつちくれを** 神の恵心が田に注ぐ雨の如く、**千里万里** 今、チサトパンリ

と見えゆ、**あめつちくれを** 神の恵心が田に注ぐ雨の如く、**千里万里** 今、チサトパンリ

と見えゆ、**あめつちくれを** 神の恵心が田に注ぐ雨の如く、**千里万里** 今、チサトパンリ

と見えゆ、**あめつちくれを** 神の恵心が田に注ぐ雨の如く、**千里万里** 今、チサトパンリ

と見えゆ、**あめつちくれを** 神の恵心が田に注ぐ雨の如く、**千里万里** 今、チサトパンリ

と見えゆ、**あめつちくれを** 神の恵心が田に注ぐ雨の如く、**千里万里** 今、チサトパンリ

と見えゆ、**あめつちくれを** 神の恵心が田に注ぐ雨の如く、**千里万里** 今、チサトパンリ

と見えゆ、**あめつちくれを** 神の恵心が田に注ぐ雨の如く、**千里万里** 今、チサトパンリ

と見えゆ、**あめつちくれを** 神の恵心が田に注ぐ雨の如く、**千里万里** 今、チサトパンリ

と見えゆ、**あめつちくれを** 神の恵心が田に注ぐ雨の如く、**千里万里** 今、チサトパンリ

伊弉諾伊弉美神社(親に官幣大社)と一の宮と稱し、**珠の宮**と二の宮と稱したるなりとも後世社説に、伊弉諾

伊弉册二神を祭る故に二の宮と稱するなりと傳へたるなり、**珠の宮**と二の宮と稱したるなりとも後世社説に、伊弉諾

二の宮は國々の社に社格の次、**御供田** 所供の料を、**内外清淨** 内は七根、外は六塵、其清なき

葉を以て呼びたるのみなり、**御供田** 所供の料を、**内外清淨** 内は七根、外は六塵、其清なき

を清め、**國の一の宮** 伊弉二の宮ならは一の宮、**標葉の權現** 三原郡標葉山に在り、**越野山十二所明**

の宮、**國の一の宮** 伊弉二の宮ならは一の宮、**標葉の權現** 三原郡標葉山に在り、**越野山十二所明**

賞へ作らんとす、**伊弉茶岐神社** 伊弉二の宮ならは一の宮、**標葉の權現** 三原郡標葉山に在り、**越野山十二所明**

を之はす、**伊弉茶岐神社** 伊弉二の宮ならは一の宮、**標葉の權現** 三原郡標葉山に在り、**越野山十二所明**

時、**伊弉茶岐神社** 伊弉二の宮ならは一の宮、**標葉の權現** 三原郡標葉山に在り、**越野山十二所明**

なれども、**伊弉茶岐神社** 伊弉二の宮ならは一の宮、**標葉の權現** 三原郡標葉山に在り、**越野山十二所明**

に伊弉茶岐社を天地大明神といふ、**伊弉諾**と書いては、**神は一きり** 云々、**神は一きり** 云々、**神は一きり** 云々

とあるを並に取り入れたるなり、**伊弉諾**と書いては、**神は一きり** 云々、**神は一きり** 云々、**神は一きり** 云々

伊弉諾と書いてたねをまくとよみ、**國古の種**となるべき姿をあらはす、**伊弉册**と書いてたねを、**目前の御**

をまむとよめりといふなり、**伊弉諾**と書いては、**神は一きり** 云々、**神は一きり** 云々、**神は一きり** 云々

神の誓約、**伊弉諾**と書いては、**神は一きり** 云々、**神は一きり** 云々、**神は一きり** 云々

り出生順に記せば、淡路島、四國、尾紀の國云々。二神是くは其樹下に降有る國を譽ぐ。志摩はも
 岐、九州、壹岐、對馬、佐渡、本州、紀の國云々。と伊勢の國にて伊勢島と云ふれば一つに淡路
 たり。四つの海層は四つの海に接せる地といふ程の意。日神月神云々。日神は天照大神、月神は月夜尊、素戔嗚尊、何
 天忍德耳尊、瓊杵尊、天武尊、天照大神、天照大神の御孫、天照大神の御孫にて大
 なり。五代の後とは五代の後なる天照大神の時代の意。皇孫、瓊杵尊、天照大神の御孫にて日
 國高千穂尊に降り、木花開耶姫を娶。八十三萬云々。神皇正統記に瓊杵尊不命尊にて、すべて天下
 りて天武尊と出見尊を生ませ給へり。八十三萬云々。神皇正統記に瓊杵尊不命尊にて、すべて天下
 と見え、倭姫命世記には千位以下を四十二年に作りたり。秋津洲、日本の名。洲は「シマ」と讀むべ
 こくに八百餘歳といふは作者の思ひ違ひなるべし。秋津洲、日本の名。洲は「シマ」と讀むべ
 たり。天の浮橋、二神の天瓊牙をもちて立ち給たり。鳥羽玉の云々。當社の神祇と云ひ傳へたるを取
 本に、又鳥武見尊、妹下照尊を思かけ、詠む歌に「鳥羽玉のわが黒髪も乱るにや。神祇百首和歌群書觀從
 れぬに結び定めよ小夜の手枕」。これ三十一字、字二の歌なり」と見ゆ。神とも今は云々。神とも今
 といひかけ、白波の泡。天の戸、天にありた。あたつみの云々。古今集に「あたつみのかざりにせせる白
 を淡路山に傳く。天の戸、天にありた。あたつみの云々。古今集に「あたつみのかざりにせせる白
 白玉とせせるは後人の改竄なるべし。國常立の云々。尊は天地開闢の最初に生れまゝ、神なり。七つ五つの
 るべし。わたつみは正には海神。國常立の云々。尊は天地開闢の最初に生れまゝ、神なり。七つ五つの
 神の代とは天神。和光守護神、起世の徳光を和らげて人界に扶桑、日本の淡路と云々の意。あれよ
 七代地神五代。和光守護神、起世の徳光を和らげて人界に扶桑、日本の淡路と云々の意。あれよ
 聲を古く、あはと。海漫々、海の廣大なる意。七すは御鐔の云々。神舞の七すす手はさながら天瓊牙をとり
 云ふと淡路にかゝる。海漫々、海の廣大なる意。七すは御鐔の云々。神舞の七すす手はさながら天瓊牙をとり
 引くは云々。舞の引く手は、其名に因む引。時つ風、潮につれて發する意。蘆原の國、蘆原の中國とも
 云。國と國富み。千秋、萬歳を受け、千秋といひ、重ねて秋津洲と讀く。萬歳樂、千
 と云ひ次ぐ。千秋、萬歳を受け、千秋といひ、重ねて秋津洲と讀く。萬歳樂、千

脇能

淡路

三月

ツレ男 伊勢諸尊(前ハ老翁) 下

早次第上

治まる國の始もや。治まる國の始もや。

淡路の神代あるらん。抑これら。

當今よは入奉る臣下あり。借もわれ。

宿願の子細あるより。信吉玉津島。

よ美詣はつら。よ美詣はつら。

こゝより淡路の國は渡り。神代の古蹟。

ちよみ見せせがやと存の
道行上 (三ノ)
 紀の海や
打切
 は吹上の浦風よは吹上の浦風よ
打切
 跡
 遠ざかる沖つ舟
打切
 潮路程あく移り
 来てよまての霞たゞ島あげや
打切
 淡路
 瀉よも著かたてつ淡路瀉よまじり
打切
 味
 より
打切
 船かゝる程いしては淡
 路の國よ著かたてつ此處のへを待ち

呼三全
 真一ノ声

神代の古蹟を尋ねざやと存の
 神の代の蹟を残して海山ののどけ
 まはの淡路瀉
種を収め
 國か
 れぞ苗代水もゆたかあり
シニヤシ上
 それ
 陰陽の神代より今人界に至るまで
 山河草木國土の皆神の恵よ作り
 田のあめつちくれを潤して千里萬

里の外までも皆樂める時打切もあや
 頃下歌も今も長閑なる世の世のい
 きたる春の氣色も様上歌もよ打切・春の
 田を人よ任せてあれ打切人よ任せて
 あれ打切唯花よはの打切盛打切もは
 れて苗代の水よはの種もあは打切れ
 此處もや櫻田の事打切もあはれ氣色

●小話

此の世をよみかゝる打切あはれ
 りてあはれ箱も打切はかしくあはれ
 の風情を思ふも田をかく打切あはれ水
 色打切もあはれあはれあはれあはれ
 あはれあはれあはれあはれあはれ
 此の春の田を作ら打切あはれあはれ
 此の春の程もあはれあはれあはれ

五十の敷^ゴ・帛^{シウ}を^キまきて神を^{カミ}祭^{マツル}りは。然^{シカ}れ
 だ^カある歌^{ウタ}よ。谷^チ水^{ミヅ}を^サせく水^{ミヅ}口^{クチ}よ齋^{イハヒ}串^{マシ}
 きて^{マシ}苗^ネ代^チ小^コ田^ノの種^{タネ}ま^キま^シり^ハり^ハり^ハ其^{ソノ}上^ノ
 此^{コノ}清^{スミ}田^ノハ^ニ當^{マシ}社^ノ此^ノの宮^{ミヤ}の^ニ供^ク田^{チン}よ^シて^シて^シ
 屋^ヤの^ニ程^ハよ。殊^カよ^ハ内^{ナイ}外^{ガイ}清^{スミ}浄^{ジヨウ}よ^シて^シは^ハ田^ノ
 を^シ作^シり^ハる^ハよ^ハ。緒^ヨハ^ニ當^{マシ}社^ノ此^ノの^ニ儀^ギよ^シて^シ
 此^ノハ^ニ儀^ギよ^シて^シ國^{クニ}の^ニ儀^ギよ^シて^シ儀^ギよ^シて^シ儀^ギよ^シて^シ

一^{ヒト}葉^ハの^ニ權^{ケン}現^{ゲン}よ^シて^シ儀^ギ
 得^エる^ハよ^ハの^ニ儀^ギよ^シて^シ儀^ギよ^シて^シ儀^ギよ^シて^シ
 此^ノハ^ニ儀^ギよ^シて^シ國^{クニ}中^{チュウ}一^{ヒト}二^ニの^ニ次^ジ弟^{テイ}よ^シて^シ儀^ギ
 當^{マシ}社^ノの^ニ神^{カミ}達^{ダツ}二^ニ柱^{チウ}の^ニ社^{シャ}の^ニ儀^ギ殿^{テン}
 其^{ソノ}儀^ギよ^シて^シ儀^ギよ^シて^シ儀^ギよ^シて^シ儀^ギよ^シて^シ
 此^ノハ^ニ儀^ギよ^シて^シ儀^ギよ^シて^シ儀^ギよ^シて^シ儀^ギよ^シて^シ
 此^ノハ^ニ儀^ギよ^シて^シ儀^ギよ^シて^シ儀^ギよ^シて^シ儀^ギよ^シて^シ

奉^{ホウ}コ^コウ^ウ

英^{エイ}各^{ガク}

日^{ニチ}

ちち伊弉諾伊弉册の尊の二柱の
 神代のまゝの宮居志給ふ。淡路の國の
 神ハ一宮居る所のの宮の葉
 め申もあう。よく聞けらあり
 なたや。儲りかゝる國土の種を普く
 受くる。徳恩徳。唯此神の誓よのう
 事新シテ白一を説く。國土世界や萬

物の出まあまわはる神徳。唯これ當
 社の誓あり。然れば聞け一天地の
 伊弉諾と書して。種時くと讀む
 伊弉册と書して。種を収む
 今目の前も。其上神代ハ
 遠からむ。今目の前も。其上神代ハ
 種を時き。種を収めて苗代のお切

地拍子
又種蒔き
種蒔き
種蒔き

種を収めて苗代の水うららまで春
雨のあめより降れる種蒔き時きて國土
もゆたかよ千里禁うる富草の村早
稻の秋よあるならん種を収めん神徳
あらありがたの誓やありがたの神
の誓やあ。猶羊角當社の神祕ねんご
ろよ伊物語のりく地クリ上ニそれ天地開闢

●ヤシクセ獨吟

の昔より。渾沌未分やりやく分れて。
清くあはらあはら天とあり。おもく濁
れるを。地とあり。然れども
五行の神あり。木火土金水これ
あり。既地に陰陽相分れて。木火土の
精伊弉諾とあり。金水の精よりかた
まつて伊弉册と顯る。然れども

英各

いまだ世界もあらざりし前を伊
 弉諾といひ 國土治まり萬物出生
 まる處を伊弉冊と申す。まゝち此
 淡路の國を始とせし。ちかやちかよや
 二柱の神のおのゝろ島と申すも此
 一島の事かとも。凡そ此島始めて大
 ハ洲の國を作り。紀の國伊勢志摩

日向並に四つの海岸を作りいたし。
 日神月神蛭子素盞鳴と申す也。
 地神五代の始とて。皆此島は出生現
 中よも皇孫ハ日向の國は天降り給
 いて。地神第四の父々出見の皇子を
 出生まげよあつたかた代こもや
 天下をたもち給ふ事 ちかよちかよ
 ちかよちかよ

三萬六千八百餘歲あり。かゝるめで
 たき白子達は、神代をゆづり葉の
 権現と現れおちまき。伊弉諾伊
 弉册の神代も唯今の國土あるべし。
 げよ神の代の道直よ。げよ神の代の
 道直よ。今も妙ある秋津洲の君の
 影ぞあり。また影ぞあり。日

隠れの雲の端よ。なまびく天の浮
 橋のまを懸して。所容人を慰めん
 とも浮橋のまを懸して。所容人を慰めん
 の葉の。其神歌は鳥羽玉の我が黒
 髪も。私のまを結び定めよ。小夜の
 手枕の歌の種蒔き。神も今白
 はの淡路山を浮橋よ。天の戸を渡り

口手最
待謹

先...の...
げよ今もも神の代のげよ今もも
も神の代のはまゝあらたありけり
し...の...
...の...
色ぞあらたありける
か...の...
白玉のほもて結る

白玉の

淡路島。月春の夜も長閑なる。翠の
空も澄み渡る。天の浮橋の上よりて。
八洲の國を求めたり。伊弉諾の神
と我が事あり。治まるや國常立
の始より。ちつ五つの神の代の

はまゝ今も君の代より。和光守護
神の扶桑の國は。風ハ吹けとも山ハ

た各

し

一子一丸

漢語

放下僧

解題

牧家僧と書きたるも、また軍に放下といふ。牧野左衛門といふ者の二兄、當時流行せし放下に於いて親の讐を利根信俊を討つことを作らり、伏討につきての卿土の風扇を洞をこしたる作なり。世阿弥の能作書に「はうか、是は軍林の末風、碎勢の態風なり」とあれば、一見古作の如く思はるも、同書にまた「はうかには、自然居士、花月、東岸居士、西岸居士などの遊莊」と記されて、同書の所謂「はうか」とは自然居士以下数曲の喝食物の遊莊の跡を呼ぶなり、と明け、偶以て當時此曲の未だ存せざりしと澄するものとも考へらる。能本作者註文に近江能、二百十番、諸目録に全春、神竹作とあるは共に後世の書なり、信をおき難し。寛正五年四月、京都紅河原の勅進、殊樂に吾阿弥が演ぜしを初の、親元日記に寛正二年二月、仙洞所、所法（親世）、飯尾宅、所法に寛正七年二月の能（親世又三郎等）を傳はる所多からず、能の始祖に傳きて見えたるは、當時の好尚に共鳴する愛ありし為か、曲中の小段の二節は後作の謡曲「花丸」（今、廢曲）に都の眺を叙したる謡として取り入れらる。

謡ひ方便概

若き兄弟、父の讐を討つまでの重き憂を、彼瀬曲折を作れる現在物を、シテ

の心持を以てすべき、思慮ある兄の悠揚、進らざる傳を、謡ひ表すに力むべし。前々ツレとの問答は、意を決するに至る心の推移を、と、折へ調子にて確りと承り、懸へ、掛合に入りては、か、つてさらりと扱ふ。後は、面用を一新し、とは、執着なき身となりしものなれば、位大きやかに思ひて、快活なるを宣しとす。此心得にて、出のサシ以下一聲に、互う拍、執速なる鼓鼓を、帯んで、更やかにさらりと謡ふ。ワキとの問答は、れ、おかに扱を、窺ふ大切の震が、れば、一語一句、延みかく、踏みに確りと應へ、白雲深き、雲以下、掛合に入りては、さらさらと、活殺自在の妙あり、と、謡ふ。能くは、ツレの謡へ、カキ、て、氣合十分に出し、一切つて、三断と、と、と、いひて、心持を一持し、た、強きあら、こそ、思ひ、れ、と、稍靜に、事、な、げに、鋒銜を、裏む、言、外、の、巧、み、か、ら、な、す。サシ以下は、さらりと、扱ひ、クセの上端は、明か、なら、る、く、月、の、為、に、は、浮、雲、の、は、す、ら、り、と、運、け、一、面、白、の、花、の、都、や、し、は、引、ま、て、さ、ら、く、と、出で、い、さ、の、み、は、云、く、を、サシ、の、調子、に、**ツレ**、後、進、ま、に、速、る、重、鏡、の、心、に、シテ、あり、と、聊、か、調子、を、高、く、テ、キ、ハ、キ、と、運、け、好、く、十分、健、か、に、謡、み、と、**ツレ**、と、扱、ふ。名、告、は、確、り、と、言、ひ、シテ、と、の、問、答、は、熱、有、り、て、他、み、た、く、中、に、就、き、唐、土、の、事、に、や、あ、り、け、ん、と、の、語、は、落、着、き、て、確、り、と、接、り、シテ、と、の、問、答、は、さ、ら、り、と、あ、ら、で、し。後、は、扱、ね、強、く、さらりと、謡、み、と、ワ、キ、と、の、問、答、は、特、に、意、を、留、め、て、油、断、な、ま、か、ら、し、め、ん、と、言、ひ、切、つて、三、断、と、と、言、ひ、は、十分、に、勢、ひ、て、出、づ、る、もの、な、れ、と、意、氣、に、謡、み、と、**ワキ**、大、名、な、れ、ば、心、持、健、か、に、さ、ら、り、と、次、第、を、謡、ひ、名、告、は、て、亂、が、は、い、く、た、と、め、や、深、き、注、意、を、要、す。

放下僧

け、漸次まをせ行ききて、「自身自佛はさそいかに以下掛合はかく...
浮かす沈ます、猶静に痛切をさそい。後には「朝の嵐夕の雨」云々と二巻にさうりと流し、されはあれら
し、云々は確りと出でく返りたりとたり。はづさざりけりと以下運出、止の返りにて佛お、何と
唯ふかしく、「云々はか、つてすうりと附け、「南無三寶」とすかりと切り、「をわりの人の心や」とゆゑめて止
むべし。サシよりクセに互りてはさうりと扱ひ、「種と心やなりぬらん」はシテを承けて出づ。「羊に若
くとも及ばし」以下の小歌は叙に間隙をつくらひのん為のものなれば、調子暗れかたにたゆみやきやう
心し、元来俗謡に擬せしものにて抑揚の趣狂言の小舞態に類し、ならぬものなれば、其心にて前面白く
ふべし。小歌の後「此年月の」云々は前と一變して剛健に、羊りは確りと締めて祝ふ心に溢れ納む
べし。

辭解

念たさう

思ひも 極勢

異様なる様子をいふ、極く

會下

禪宗の寺院にて多数の僧侶の法修行するを

湖會といふ會下は湖會中の一頁の意、又學子徳ある人、誅合 併合 今さら、か、
殺害は佛の戒むの下に多人数集りて修行する場合にも其會下と稱ふ。

唐土の事によ

漢の李廣といふ人、虎に母を害せられたるを聞き、跡を辿りて山にあり、虎に似た
なりしかば、李廣更に之を射試らば、矢は踊り返りて二たひ立たず、全く虎を射んと思ふ心の深かりしに依
りて此事ありしなりと今昔物語に出づ。「思ふ血流れけりとなり」といへるは流曲作者の誇張せらるものな
りべし。此事漢史記漢書法苑珠林等にも見えず、母の虎に害せられたることを記せしは今昔物語のみ
なり。これら事柄を誇張せらるべし。其外石を虎と見誤りて射中てたるとは呂氏春秋、韓詩外傳此
史にも出づ。きつと、しかと物に心附、放下、田樂法師の類にて或は商軍に會せしを韓詩外傳、又
てたり。きたる意の詞、放下、田樂法師の類にて或は商軍に會せしを韓詩外傳、又

有明の

名残も有りといふ有明に掛け、古今集の「有明のつれなく、なかりふる、
見こし別れより」云々の歌によりてつれなくと後く。

神社の周圍をうり垣構じて神社の意、茲には神社に奉詣する意にて言ひ、垣の像
にて隅の隅を起し、善惡の隅をうり平等に覆りたまふ神の誓を候まんと云ふ。瀨戸の三島 武藏國久良
にある瀨戸の神、僧俗二つの、杖下の安の僧にも非ず、其ふるまひを隠れが、異様なる姿調を素
社、三島神社、落花一陽、一陽東復の春は知らぬ所に過ぎて早や花と散り、白、流水山上、
と云ふの意、雪初夏の青葉の山を散ふとなり、流曲曲不、朝の嵐、夕の雨
に映ら紅葉と山上の紅葉と、其色を争ふ秋の意に、ここは落花の語を承けて流水、朝の嵐、夕の雨
を出せりは瀨戸通用の成語に「落花無心流水無心」送落花の句ある様なり。朝の嵐、夕の雨
亦明日の昔となり、村雨の如く變轉定のかく、經過早き世ならにわれらいつて、敵をあたおらそかに思ふならんと
かり、昔と云ふ、夕の露と云ひかけ、後撰集の歌、神無月ふりみふらみ空のなき時雨を冬の初なりけるに
ありて村時雨空のなき世と云ひ、世に控る古川、水のうたかた(泡沫)と云ひつけ、泡沫の破れといふ言を借り
てあれいかばと承け、泡の破れといふ像にてあだの語を出す。あだは空しく、いたづらなる事。

悔の袈裟衣、自己の造りし罪過を後悔し他の容態を清ふことを憾悔といふ。袈裟は梵語、僧の着する衣。
此には罪障滅悔を、印度の本制は袈裟即ち衣なるを支那日本に於ては袈裟以外に衣といふ僧罪を作ること、なかり、
表示する袈裟の意、柱杖、僧の携ぶ、團扇と申すは、團扇は之を動かせば清風をまじ、動かさざ
れば、自己修行の助縁として我身が團扇を所持するは理りなりとの意、道具ぞろか、道具に使
鬼の皮女、月中に鳥、月中に鬼、鬼は月を表するものとせらる。淨穢不二

以及びせらるなり。八十華嚴 月のためには 月には浮雲が障となり、心に 面由の云 以下「うち
 徑に「三界所有唯是一心」。月は迷妄が妨をなすとの意。 有りのものか或は作者が作りしものか明なきも、永正の序文ある周方集に此歌を載せ「華に盡く
 とも」を「華で盡くとも」とし、「茶壺」としたるを見れば、 花の都 華嚴なる都の意に、陽春
 少くとも、様曲以後に俗謡として歌はれしものかと思はる。 清水 同く、培東清水坂の上なる清水寺、此寺の在ら
 車、祇園 四條橋の東、祇園天主社は祇園感 清水 山を吾羽山といひ、境内の龍を吾羽の龍といふ
 都、神院と云ひしが、今は八坂神社と稱ふ。 地まの櫻 清水寺の鎮守なる地ま権現 法輪 洛西蜀野即嵯峨
 により、水落つら、落ちくる龍、龍 空藏堂と稱ふ。 嵯峨の御寺 北嵯峨にある淨土宗の寺、清涼寺と 廻らば廻れ云 見物し
 の音、吾羽の山嵐と頻次云ひ次ぐ。 清水のありしことは、徒然草に「龜山殿の淨池に大井川の水をまかせ
 空藏堂と稱ふ。 嵯峨の御寺 指す。世に嵯峨の釋迦堂と稱ふ。 廻らば廻れ云 見物し
 と、水車の廻らんとを兼ねぬ。昔らくに水車のありしことは、徒然草に「龜山殿の淨池に大井川の水をまかせ
 られんとて大井の土氏に仰せり水車を造らせられけりし。又、應仁記に「臨川寺の水車はのぐる跡なくな
 りはて、昔の嵯峨の四都深き野と云ふ。臨川せき とも臨川井堰とありしものか、臨川の意、臨川寺は
 にけりし大井川は嵐山の下を流る桂川。臨川せき とも臨川井堰とありしものか、臨川の意、臨川寺は
 渡月橋の北にあり臨濟。川柳は云 川柳の折は流に映ら影が水に なくら雀 なくらか げに
 宗の寺、夢窓圓師の廟基。川柳は云 川柳の折は流に映ら影が水に なくら雀 なくらか げに
 まことと 云 採まれ盡しに浮かれて大車之物 こそざりこし 割りたる竹を短く切り、打ち合せて拍
 を忘れ居たりと心づきたらむ。 子をとらるもの、其鳴る音によそへて
 コキリコと云ひしにや。後世の四つ竹といふ竹を二つづち打ち合せて鳴らすものか、此こころこも二
 つの竹を四つ竹の如く鳴らすたるならし。以下竹の節を「よ」と云ふにより世々に長く、職人盡敷合に「月見
 つい」たふ枝下のこときりこの 其期 其敷 竹の夜聲のすむわたるかたなり。

四番目 畧二番

放下僧

無季

ツレ 牧野小次郎
シテ 牧野兄譚僧
ワキ 利根信俊 狂言 従者

中を者まてい
よ

常しよの者ハ下野の國の住人牧野の

左衛門何某ら子よ小次郎と申ま者

まてい。さても親まてい者ハ相摸の國の

住人利根の信俊と申ま者と口論し。

念あり討たれてい親の敵まてい程よ。

討たやとふ存いよも敵ハ猛勢われ

放下僧

らむ唯一人の事と申す。思ふはあはれなく
月日を送つては。よき事と申す者。幼少より
出家仕つ。あたらしくおの會下。あまう
よ。使もあはれ。同。さし。裁。し。て。此。事。を。護。念
せ。し。や。と。存。じ。し。は。禁。内。申。ふ。誰。も。て
違。つ。と。ぞ。某。の。事。と。申。す。や。此。方。へ
あたらしく。か。し。唯。今。の。何。の。為。よ。來。り

給ひしとぞ。か。し。唯。今。來。る。事。餘
の儀。あ。ら。む。あ。れ。ら。ら。親。の。敵。の。事。
討。た。げ。や。と。存。じ。し。は。敵。に。猛。勢。あ。れ
ら。唯。一。人。の。事。と。思。ふ。あ。は。れ。なく
月。日。を。送。つ。て。は。あ。ま。し。諸。共。よ。思。ふ。め
あ。ら。む。事。と。申。す。一。行。の。尤。も。て。は。入。ら。む。
あ。れ。ら。ら。事。の。幼。少。より。出。家。の。身。よ。て

の程よ。今更に言ひまはして シ 忠孝の

事の事よ。かくも親の敵を討たぬ

者、不孝の由を申す シ かく親の敵

を討つて孝は供さうた。事の事よ。かく

あつての事。 語 虎の事よ。あつて

母を悪虎ともかく其敵をかくして

百日虎伏も野に鼻の上をいでい狼よ。あつて

野に鼻の上をいでい

あつての事よ

夕暮よ。尾よの松の本をげよ。虎よ似

たる木石のあつてを敵虎と思ひ番入る

矢あつてはなまじくして交り。この矢もあ

ちちら イフオ 敵はなまじくはなまじくして交り。この矢もあ

つてはなまじくはなまじくして交り。この矢もあ

ちの矢もあつてはなまじくはなまじくして交り。この矢もあ

ちの矢もあつてはなまじくはなまじくして交り。この矢もあ

らよのあま。此よの諸君も思ひな
 者よ何んかしてかかか
 と業一もたの事のもの。この頃入の
 敬びの教下も程よ。其の教下よ
 あつて。身身の教下僧もあつて
 彼の者禅法よ好きたる由申の程よ。

敬びの教下も程よ。其の教下よ

禅法を行す。其の教下も程よ。其の教下よ
 して。思ひな。其の教下も程よ。其の教下よ
 思ひな。其の教下も程よ。其の教下よ
 身をかやう。其の教下も程よ。其の教下よ
 つ。教下の法よ。其の教下も程よ。其の教下よ
 ま。其の教下も程よ。其の教下よ

名残もさぞか有明の。名残もさぞか
 有明の。つれあさあづらあかあこいの
 ちぞ限兄弟ハ我ら心をや頼むらん
 我ら心をや頼むらん
 歩をはとぶ神垣や。歩をはとぶ神垣や。
 隔てぬ並れたのまん。これハ相摸の
 國の信人利根の信後と申す者よてい。

早次第上

中入

わに此向うち續おる葉見あくる

後ニテサシ上

一声

後ツレ

程よ。瀬戸の三島へ葉をよと存る
 面白のあれらが有様や。僧俗二つの
 道を離れ。娑詞も入よ似ぬ。その
 あらまひを隠れがと。思ひ捨つれだ
 安き身を。知らであどわの迷よらん
 落花一陽の春を知らむ。白雪青山よ。

ツレセイ上

後下

上

小註

下引

蔽ふとシカトか 瀧水ツル山上カミの秋アキりて
 紅葉コハナをコト辛ツルふコトありコトありコト 朝アサの嵐カゼ
地上歌
 みの雨アメ朝アサの嵐カゼみの雨アメり又明日アス
打切
 の昔ムカシぞとみの露ツルの村ムラ時雨ツル定サダメあま
打切
 せよセヨあまの川のカハ水ミヅの泡沫ウヅあれいよ人を
打切
 あだアダよや思オモよらんラン人をあだアダよや思オモよ
打切
 らんラン 瀧水ツルと申マシふ 瀧水ツルと申マシふ
在言 在言

瀧水ツルと申マシふ 某ナニのコト瀧水ツルも申マシふ
在言 在言
 ある者アルモノの瀧水ツルも申マシふ 又マタある者アルモノ
在言
 方の名ナ字ジをば何ナニと申マシふぞ 又マタ
在言
 苦クからむコトの昨キノ放ハナ下ゲまあるコトたるコト
在言
 所トコロ申マシふ入イ 面オモよ不フ審シ申マシふ
在言
 たまタマ事コトのコト承ウケらるコト 凡ソレそレ沙サ門カドの
在言
 形カタチと云イハふコト 十ジュウカの珠ジュ叢ソウを辛ツルふコト 纏ツルひ
在言

放下僧

下

忍辱二諦の衣を著。罪障懺悔の袈
裟を搭けてこそ僧と申せしけれ。
異形のいでたち心得せし。又見申せば
杖に團扇を添へて持たれたる。團扇
の一向承りたる。これ團扇と申
まふ。動く時よ清風をあ。静ある
時よ明月を見せ。明月清風唯動静

のうちはあはれ。諸法を心が所作として。
眞實修行の便も。われらが持つハ
道理あり。とめ給ふぞ。愚ある。團扇
の一向面白うい。今一人の弓矢を帯し
給ふ。弓もお僧の道真ぞうか。これ
弓と申せし本意よ。鳥鬼の姿を象り。
日月をいよ表し。淨穢不二の秘法を

表をさして愛深明まも神道のちを
 張り。方便の矢をつまよつてカレ上四魔の
 軍を破り給ふ地上さればあれらも
 これを持ち打切さればあれらもこれを持
 ちて。一ホかぬろ。放タたぬ矢も射タの時ハ
 昔タらまはしタたタつタけタつタとタ。タヤタヨタ
 よむ歌もあり知らまな物も宣ひそ。知

引すぬき

らまな物も宣ひそコヤして教下僧ハ
 何れの祖師禪法を傳傳入シテ面々
 の宗體が承りたるシテあれらシテ宗體
 と申すハ。教下シテ別傳シテのシテしてシテもシテいシテたシテ
 といひ説くものもあつた。昔句シテは出せば教カレ上よ
 落ちた。又シテ宗體シテは背くた。
 一葉の翻シテの風シテの行くシテをシテ法シテ賢シテ入シテせばシテよ

^早行のり〜面自らうら。さて坐禅の公案何
 と心得るをいへん。早^ハ〜入つてハ坐玄の底よ
 動カ。出でハ三時の門は遊ぶ。早^ハ自心
 自佛ハさていへん。早^ハ白雲深き處金龍
 躍。早^ハ生死よ命を。早^ハ輪廻の苦
 生死を離れん。早^ハ斷見の科。早^ハさて
 向ふの一路くらげ。早^ハたつて三断とあま

一三二一五三
 いまの山の老跡
 踊。色まかにいで。南無三寶

●獨吟サシクセ

^{シテ}暫らく。切つて三断とあまこゝ。禪法の
 詞あるを。お騒がしめる。思をあれ
^{地上}何と唯ありく。よ。たつての山の岩躑躅。
 色まかに出で。南無三寶を。の人の
^{在言}心や。物著。さ。た。の根機を嫌
 ち。持戒破戒を。有無のこ
 偏に落つる事なく。皆成佛さるため

文六巻

仕舞

あり かつら 故よ 草一本も 法身の姿
 を 現し 柳の 緑花の 紅ある 其色こそ
 現せり 青陽の 春の 朝よ 谷の
 戸出づる 鶯の 凍れる 涙とけそめて 雪
 消の水の 泡沫よ 相宿り 暮る 蛙の 聲
 聞け 心の あるもの ちよ 目よ 見ぬ 秋を
 風よ 聞え 萩の 葉とよ ぐ 吉里の 田面よ

そよぶ

一調 謡五曲ノ内
「傍り 俗へやし 子
小謡ニモ

落つる 雁鳴きて 稻葉の 雲の 夕時雨
 妻恋ひかぬ 小杜鹿の たぎむ 月を
 山よ 見えて 指を 思あり 引ら
 の 湊の 釣舟の 魚を得て 釜を 捨つ
 とれを見 ちれを 聞く 時の 嶺の 山嵐や 谷
 の 聲よ への 煙朝が せみ 皆とれ 三界
 唯心の こと あり あり と思しめ 心を

かへり

悟り絵くや。月の為は浮雲の

種と心やありぬらん。面白の花の

都や筆は書くとも及がら。東よ

祇園清水落ちくる籠の音羽の出風よ

地まの櫻は散り散り。西は法輪山嶽の

寺廻らむ廻れ水車の輪の臨川

堰の川は川柳の水よまあるは志たり

●小謡

仕舞

面白の

嵐地まの

輪の臨川

由代ゆかハ外ス
心ニテオホモトヒ
ト見テ可ナリ扱
ヒハ左ノ如シ
ナリハナリ
由代ゆか

やまの園もあはれいづら雀の竹よ
もまの都の半の車もあはれ茶臼の
扱本もあはれいづら雀の竹よ
あはれいづら雀の竹よ
あはれいづら雀の竹よ

このころの竹の代を重ねて打ち活
まうたるは代かあ。あはれいづら雀の竹よ
あはれいづら雀の竹よ
あはれいづら雀の竹よ

敵よきらぶらう。此年月の怨の末。今
 こゝ通ひ願のまゝよ。敵をぞ討つたり
 ける。かゝるて兄弟念方のかゝるて兄弟
 念方の。其期のありて忽ちよ。親の敵
 を討つ事も。孝行深き故よより。名を
 末代よ留めけり。名を末代よ留めけり

吉野静

解題

義経吉野を落ちし時、忠信静と語りて備兵の追躡より免れしゆんとし、忠信は都道者を誑ひ
 て親朝義経を解せりと衆徒を驚き、静は亦法樂を奏ひて衆徒の足を止めしことを作れり。
 作者主として義経に據れりと見ゆ。本篇はもと前後二段より成る通常の形式の法曲なりしが、古くよ
 り其前半を削ぎ、後段のみを半能の式として流する例となり、現に能樂五流の中、親世、實生、全剛、全
 春は此例を襲ひ、妻多流のみ其前半を存せり。思ふに妻多流獨立の當時（元和四年、大正六年を距る事
 三百年前）他の四流既に半能の式なりしを、流派を樹つると同時に、諸曲を及第したる序、此曲の前
 半をも居し加へたるに非ずか。きはあれ、親世流にては時に前段より通して流したる事ありと見え、吉
 野静の前の名の下に、別に其前段のみを傳へ居たり。これと妻多流の前段とを比ぶるに、静の序の末節に
 出入はあれども、大体に於て相違せず。此前段はワキの次男に執まり、名告・サシ・下敷・上敷ありて、
 シテの出となり、シテワキの回答に、ワキは一人留りて防矢を射たりしことを語り、シテは此山に於て
 られしを歎く詞あり、次いで大講堂の方に義経追討の貝鏡の圓ゆるに心づき、忠信の發業により、静は勝
 手の御前に至り法樂を奏して衆徒を引きとめ、忠信は都道者に捲り衆會の席に至りて義経兄弟の和解
 せし都の風説を語らんと約し、思へば渡三吉野の、よ一通れすと名をだに、産し申さばそれまでと云々
 と、袂を別ちて中入するものなり。現存の曲は後段の文を打き替へて、此前段を除きたるため、前後の
 脈絡を缺き、文に虚実なる處あるを免れず。又此曲は言繼新記、親元日記に吉野静の名出でたる外、古
 記に其名を存せざれども、古く單に靜（又は閑）と稱したるもの思ふらくは此曲なり。靜の事を作れ
 る曲は別に二人靜、安達靜（別名、義實靜、御前靜ともいふ、今は廢曲あり、近古の外には法事靜、鶴
 岡（共に廢曲）等傳はる處少からざれども、いづれも法書に其名見えたるは、單に靜といへるは此等以外
 の曲、即ち此吉野静ならざるべからず。靜につきては世阿弥の六十以後中樂法儀に「つかの舞の能と
 見え、また井阿彌の作として挙げたる外、能作書、歌舞體記等にも記録あり。又、看同日記に
 永享四年三月（つが）かとききたる所に、由緒子と小書せり。親元日記に寛正六年三月（親世）の能の事見ゆ。此
 うち親元日記には別の時の記事に、二人閑、安達靜の曲名出づ。吉野静を二百十番法目録に親阿弥作、
 能本作者註文に世阿弥作としたれども、二書とも没録多くしていづれをも信し難し。若し靜、吉野静、
 同曲なりとせば、井阿弥の作といふ申樂法儀の記録を以て正しとすべきこと言ふまでもなし。
 普通通の三番目物とは趣を異にし、さして心持後急等なり。重々となら。シテ位と
 ぬやう通してさらりと、さつぱりとしたる味はひに違ひなきべし。

謡ひ方便概

シテ位と

程の位は取りず、儀に品好きを程とす。世のさても静は忠信が云々は、物未かにさらりと流ひ出し、ワキとの掛合は素直に承け渡すにけのうと云々の句をむつくりと出で、かやうにより調子静に運びをさらりめに扱ひ、一

わはさらりと承けて返すを聊か流むる心よりなまじ申しごとより前の位に度す。果は時刻や移すらんはシテの氣を外さず、附け、けに此御代も静がまひは置に流ふ。ワキ以下さらりとなり、クセは静に出で、されば義短はより猶さらりと、頼朝も圓いめ、の邊を確り、さあはよりもとへ返り、上端前にて鎮め、上端後は氣を束せてたゆみなきやうにあらるゝむか、と今に云々はシテの氣を受けて、橋ゆるやかに附け、あまりに舞のより引き立て、来り好くさらりと出で、さる程にの邊を確り、はかりごとにてより再び氣を束せ、止メを確りと流ひ納む。

都道者 神社併岡に本泊。衆會 衆徒の上は御一鉢 上とは頼朝をさす。頼朝は義短の勢、主は十二騎は他の者の百騎。宿坊 本宿者宿泊の便宜の爲に設けたる。思へばかやうに申す云

光悦本度長出版、板木の最初のものに思へば知らせ申すなりとあり。吉野山 御計らひ宜しからんの意にて一々は擧げざれども以下の文にも光悦本と相違の箇所少からず。よーなき 後にもよーの古を重ねて次に

光悦本度長出版、板木の最初のものに思へば知らせ申すなりとあり。吉野山 御計らひ宜しからんの意にて一々は擧げざれども以下の文にも光悦本と相違の箇所少からず。よーなき 後にもよーの古を重ねて次に

に義短に授けて武藝を抽づ。義短は義短の後、吉野山に留りて義短の進行を使なうりぬ、後使いて京に上り、主は再び會するを得ざる間に所在發覺し、翌文治二年秋精谷有秀の兵と闘ひて自刃せり。時に年二十六。義短、平家物語、義短記等に小説的に記されたり。忠信吉野に踏み止。法樂 神佛に手向くまり、事は別に忠信に作られ、其宗跡は今法はれざる法曲愛書に作らる。記に、身までなくとも法樂の事は若くかるま、(中略)つひにかくぞうたひける。ありのすさびのにくきだに、ありきのあは忠信に、あかて難れ、面影を、いつの世にかは忘るべき、わが世の殊に悲しきはおやのわかれ、子のわかれ、すくれてげにかななきは、夫妻のわかれなりけり、と涙のいきりにす、みけければ、衣引きかつき臥しにけり。此事は義短記筆者の殿光にて固より史實にあらざれども、これとても猶法樂を教ひたるまでにて、身ひたるにあらず。下向道 等々地より他に趣く行途。こゝに然るを法曲作者更に戯曲化して本篇を成したるなり。世のきこえ 世の先非を悔いて、今すて義

者には品少 口敷き者には品に乏しとの意。童言の葉過きは 饒舌り過なかく。なかく 一切知らすなもくも云 若く義短一味の者と看破られもせんといふと三吉野 かくつて知らすな といふと吉野の神の八勝手に掛け、勝手の神も知らせぬやう道り給への意を寓す。勝神明神は 静にははやせや 吉野八神の一にて、其初は十回平本の編ある七曲段の情にあれど祭神は詳ならず。静にははやせや 衆徒も時刻をうつさんと、の謀なり。神道は重んぶ 義短は神の念慮く、又尊王の志 法皇の敬慮を安んず奉り、神は正直の頭に宿り給ふなれば 去き法法、神は非禮を 其間世の心にも無しとなり。神は正直の神の法樂の、うつり 来り移 景時 扶原平三景時。頼 着のみに福を授け給ふとなり。義短記の神の法樂の、うつり 来り移 景時 朝の衆臣。武勇な 藤にも同句出づ。又太平記に、神不享祿、彼者正直頭。起原、次に後述、流る、水、渡邊 義短が八島 頼とも人と相容れず。義短が頼朝より、みなかみ 起原、次に後述、流る、水、渡邊 義短が八島 猜疑せられたるも其境奥つて力あり。

早 十二騎のりしはさしし 十二騎のり

が別ひかり討ちあはせり 暫い

十二騎の申さるも 餘の勢百騎二百

騎の申すも 都の者。

當にやいふは 寺の宿

坊も難あへり 思ひ

早 申さるも 申さるも

あやうし申さる

地上歌

判官の後のもあはる 暇申

忠信がその契約を 舞の仕

来ひたりし 忠信と待ち居

たり 都道者として 法樂の

道者として

吉野

吉野

舞の由承り。下向道^{ゲコオド}が成して。せや
 はや舞を始め給べ。都^{ミヤコ}の人と
 聞げど。ありありや判官^{ワノリ}道中^{ミチノナ}に
 上の聞え。いふこと。都へも知らせられ
 終^{シヨク}に。道中^{ミチノナ}直らせ給べ。と聞へり
 人の先^{サキ}難^{カタシ}を悔^{カムシ}して。皆皆^{カミカミ}思^{オモ}はせ給へり
 儲^{シヤク}の嬉^{ウレシ}も。舞も。知らせ給へり。都へ

^{早付}あまうし事延び時移りぬ。心得^{カニトシ}給へり
 舞の袖^{シズメ}げ。このう語多き者^{ウコトタキモト}の品少^{シノシ}
 あ。あまうし。われら言の葉^ハ留^トり給へり
 あらう人も怪^{シヤク}みても。ももてあ
 三吉野^{ミヨシノ}の。わつて知らま。静^{シヅカ}よなや
 せや。静^{シヅカ}が舞^{マシ}よ。衆徒^{シヤク}も時^{トキ}刻^{トキ}や移
 まらん。神^{カミ}こそ納^ナめよ。あ

●サシクモ高外

げよこのは代も。静がまひ。然るよ
彼の判官。神道を重んじ。朝家を
敬ひ。心より忠勤を抽んで。私の
心さらよあ。入。讀。由。ま。も。
神の正直の頭。宿り給ふ。静が
舞の袖。暫ら。く。ら。あ。ま。
我が君を守り給へ。祈り。あ。ま。あ。

●仕舞

ける。景時。其。護。言。の
み。あ。あ。み。あ。思。入。渡。邊。や。流。る。水。よ
滿。朝。の。逆。櫓。ま。て。し。て。浮。船。の。梶。原。が
申。し。て。よ。も。頃。義。ま。て。し。や。ら。さ。れ。だ
義。經。の。も。く。よ。修。め。三。吉。野。の。神。の
誓。の。真。あ。ら。頼。朝。も。聞。め。直。さ
れ。義。經。の。ま。つ。せ。ら。の。敷。を。受。け。流。陽。の

地相子
あかすこ。

西南ハこれ分國とあるべし。さあら
當山の衆徒こまぐく集落し。帯依
湯行の片袖の惠をいただき給ふべし
あかりと不忠あり給ふ片斜は
まだいし衆徒中よ猶憤り深う
して道なめて追かけ給ふその
名聞ゆる入とを討ちあめ申さる。

●仕舞

舞の面

片岡曾尾鷲の尾さして忠信の並び
あき精兵ぞよくよ防矢射られ給ふ
あと語れざげよ衆徒中よ進む人
こそあらけれ。賤や賤序ノ舞 (又中ノ舞) 賤や
まづ賤のき環繞りかへし。むか
しを今よあまのりもかか上のまりよ
舞の面白なる時刻を移して進まぬ

言子舞

もありけり。又ハ判官の武勇も忍びて
 義経やぶ。おと申せと。詮議を
 加ふる。衆徒もありけり。さるほど時
 移つて。年君も今ハ忠信がはかりこと
 まで難おくはるか。落し申しつ。心
 志らるは願成就して都へきて
 帰るけれ。

義経やぶ

衆徒も

籠太鼓

解題

獄を成りし罪人の妻、捕へられて獄に下されしが、まは狂言を装ひ、牢は真に狂言して夫を
 籠められ外上は、は聲を聊か下に取りて静に言ひ、「もとより黙しき」とは素直に答へて、「夢にも知らず
 外」と心持ありて止む。神は牢の内にて思ひあづらふ心なれば、我分しのふかに泣き出し、「つめども」といふ伴
 り狂ふ心に受へ、一息おきて、前とは全く別に出で、調子を上に取り、「あざとらしく、何々しき、思を身障
 りならぬ程に泣いたすべし。何故狂言するぞと承る」とは、何をかけてすらすらとありて、「これは何と
 も覺えぬものか」と云は、前へかけて出で、猶静なる心持にて確りと云ひ、「夢うつくにも知らぬもの
 を」と火しく心して、軽くワキへ度し、「神志はあがたけれど」と云は、抑へぬに出で、「此牢の内をば出
 づまうや」と強みにキツパリと云ひ、何をかけて、「これこそ形見よ」と云は、泣き出で、「この心は、一変
 稍落着きたる様にして、おはらぬかに言ひ、「さうにて、この一句思案の心にてゆりかか、この心は、一変
 して狂ひの如かりに、調子を高めてすらすらと扱ひ、其意案にて一聲を引立て、泣き出で、「この心は、一変
 は」と云は、前へかけて度りと出で、又聊か静まりし心なると、面を引くは、抜けぬやうに、案合好
 く言ひ、以下さうらりと泣き出で、「時守の」と云は、思取りて、新に大きく、丁寧に扱ひ、思は、遅くて、を
 拍子に合せて、クジシの調子に泣き止む。のうた鼓を、云は、はかづつて言ひ、「鼓の聲も喜に立て、は、一
 の調子にて、たうぶりと、湘浦のうらや」と云は、何を同じ調子にあまり、涙をにならぬやうに、附け、「つづくも、や
 は、前の案を承けて、「かづつや」と内へ取り、「九つのは引立て、大きく、ワキとの向合に入りては、
 狂ひの心を捨て、いかもあまり静に、返さぬやうに、承け應へ、掛合に移りて、項次調かに案を来す。
 キ

キ

主人なら威を持ちて、是も弱々しき、處なきや、キビク、
 とあちが宜けれと、諸氣の思、互たぬやうに心すべし。
 地

地

初の上鼓は前へかけて、強みに
 へ取りて、心す。次の地、無愁や我が夫の、云は、はかづつて出で、「盡きの名残を、悲しき」と、静の、以下、文意を味
 は、引いて、餘情深きやうに、泣き出で、次の「涙に、咽ぶ心な、は、シテの案を承けて、たうぶりと、附け、「遅くも、思

か来んまでぞは更へて扱ひ、シテとの掛合はさうりと承く。上段「鼓の聲も時ふりて云々の一章は俗に鼓の段と稱へ、心乱れて鼓を打ち興ずることを作れる處なれば、通じて十分に来るとあり、調子好く扱ひて花やかにさうりと謡ふが宜し。只此等頼めば、云々はさうりと附け、幸りは初の一句を結ぶかめに治で、通しよりさうりのめに、松浦の川や二世の縁」と結び、最後の句にて謡ひ鐘を。

辭解 **松浦の何某** 松浦に任める某の意。松浦は今の肥前國松浦郡の地。和名松には之を五脚に合てり。 **關の清次** 記録に見えず、或は梁塵秘

抄に「はくちのこのむもの、早さかきなさい四三さい、それをばたれ口(原書脱字)うちえたら文讀京さん月々清次とか」とあると何等かの縁ありや、何れにせよ當時の世話茶話を其儘取返し、云々たるは、又は風聞に基きて脚色したるか、二者何れかならむべく、確としたる曲據ある程のものには非らばし。寛永の奥書ある寫本、松浦鑑といふ書に清次の記録ある由なれば、此縁曲よりされたらものなると因り論じ、念たうり、いふ急の時代語。 **牢者させ** 入敷させの意。牢は人を押し籠むる處なれば古其字を用ふ。深き。 **大剛の者** 剛體にして脱力勝れたる者。 **言語道断** 言語に絶せる意。もと佛敎の語より。 **つま** 夫婦いづれより。 **落居着** ありあ。 **無慙** いたま。 **やあ** 如何に汝は云々。 能くは此とらろ狂言方出で来り、女を引きて主て行き、「がつきの(鐵鬼のの)

さげ 俗にいふたはけ。 **鼓** 十拍、時刻を報するに支那の制に倣ひ、時には鼓、刺には鐘も打ちなり。此任に當る者を時守といふ。 **思うちにあ** 思ふことと心の中にあればおのづから腹に現るなり。 **人の心の花た** くらば云々。古今集に「心花の外に、つめども、古今集の歌を引く。本ふものは世の中の花にぞありける」とあるを引き、若し人の心が花とらば、風の狂ふにつれて狂ふ事もあり、と云ひ、況して深く契りし夫の行方も分らず、獨り獄舎に契らる身、身を争て狂ふ事を得んと、 **借老同穴** 夫と共にして死しては同穴に埋められんと願ふ契、固く **道せば**

世道せまき急意、今の俗法に世間狭しといふ類。それに獄中の狭きことを兼ぬ。 **僻事** 道なから。 **あらはし夫** ありはし夫といふ戯あらはし衣といふ戯、あらはし、袂の音、 **とく** 早。 **雨の夜の** 調花集に「影見その居は雨夜の月たれや出でくも人にて綴れらにや。 **西樓に月落ちて** 和漢朗詠集、菅原文時

の月に翁へ出づまの語を前に置き、月の音を承けて、雲さ、の名残とつげ、次句に西樓の月をいふ。 **花を命短かき花時の間の意に轉じ、其短き間うへも、未の遂げられぬ契の薄きと大影薄き燈に云ひかけ、火の縁にて焦う、と承く。前掲の詩の第二句、殘燈の辭を敷衍して、 **影はづかき** 影の僅さを、人に見らうとわ。 **乱るは柳の髪か** 影の亂るに云ひかけ、青柳の髪より春雨を呼び起し、轉じて春雨を後に翁へ。 **時** 心乱るを髪を亂るに云ひかけ、春雨の髪より春雨を呼び起し、轉じて春雨を後に翁へ。 **時** 蟬丸の柳の髪を、風は梳らるに云く、能野の「春雨のふる涙か」と取り、合せ用ひたるに也。 **時****

守 前掲の鼓、時を知ら。 **異國** 支那を指す。 **其心を得て** 其意味。 **時守の打ちます** 萬葉集に「時守が打ちます鼓よみ見れば時はなかりぬあはなくも危し」とある、此場合當らず。打ちますの誤から、事論無し。鼓を語る程の若の誤も、べき詞な。 **音に立て** 音にらねは、謡曲以後、鼓音相似なる為、猿樂師等に謡ひ誤りて傳へしなるべし。 **音に立て** 音にど見えて古より竹に鳴く鶯をよみたる故多きより、鳴く **湘浦の浦や** 若支那の天子舜の妃に城鶯と云ひて竹に鳴け、竹より城皇女其の故事に及ぶ。 **湘浦の浦や** 湘は今の湖南省の巨川湘水なり。こゝには舜死して後、二女楚國湘水の邊にて泣き悲みて穴をくなくしが、其涙岸の竹にかりてあり、此方、湘浦に産する竹は斑紋ありといふ、和漢朗詠集に「竹斑湘浦に」湘は今の湖南省の巨川湘水なり。こゝには夫を思ふことの切なるに **諫鼓若むす** 和漢朗詠集に「諫鼓若深鳥不驚」とあるを引く。諫鼓よめて二女の名を連ぬ。 **諫鼓若むす** 和漢朗詠集に「諫鼓若深鳥不驚」とあるを引く。諫鼓よめて其用無きに盡り、終に若の生するに任せ、再び鳥を驚かさずとらるなり。諫の故事を云ひて、竟の故事を思ひ起し、鼓を云ひて、打つといふを現なきに掛く。現なきとは、正果の無き意、とらるなりと云

もたぐり故事を引き連ねたりと承く。時よりて 諫鼓の連く時代を授けたりと、今打つ鼓の時刻うつり
 なやかなは感歎の聲、なき哉の意。 時々の鼓、今午及午後の八
 時、即ち今の午前及午後の時なり。 五つの鼓 今午及午後の八
 下、五つの音を重 實無きこと、笑の實なく空しく、 妻琴 今午及午後の十
 ちて偽に續く。 あだ つま(夫)下りの意にて次第に續く。 刃心音 夫の世に隠れ、人目
 琴の得法の厚くに音を傳りて夫の引き離れ出で行きしを云ひ、出づを待じ、 四つの鼓 今午及午後の十
 ていづくに續く。こゝに琴を奏せらるるは、軍に辞句の後にして別の意味無し。 徐 今午及午後の十
 わが身の人に知られしと聲を抑へて注くに掛け、更に鼓を やはらく 徐 四つの鼓 今午及午後の十
 音高からす打つ意とす。忍音は人に聞かせじとする聲也。 世の中に 後成卿の鼓に「忍せずば人内心もなかりまじしもの」
 を重ねて世の中と云ひ懸かるなり。 九つ 今午及午後の十二 面影に立つ 今午及午後の十
 や、忍や恨の世にたまたまものなかりは、いかに 御知見 御照覧といふに同じ。 附近の二神と 宰
 で我がくひしり物と思はんとす。 諫訪 松浦郡の八幡 幡大菩薩 御知見 呼びさまとして神前に誓をまつるなり。 宰
 府 筑前の 珠勝にもの意。 十三年 回忌 たすけ舟 目前夫婦の殺人の罪
 を助くといふ浄法の舟に通はせ、其佛の清度を待たせしむるに同じ。 西の海 九州の海を西の海といふ故
 松浦川を呼び起す。古くは「たすけ舟」とあつたなり。 彼國とは阿蘇院如來の浄土世界をさす。且地は佛院に安樂
 の語を川の語 彼國近き くの西方にありと説かれたれば、西の海を彼國に近きと察す。 本久に 行く末久
 に對せしむ。 彌陀誓願の誓 衆生を清度すと云ふ殊院の諸の誓願。誓願の誓 本久に 行く末久
 それを松浦川の流久しきに取らる。 二世の縁 二世は現世と來世と。 川に渡に通はせて二世と續く。 二世の縁 には夫婦の縁をいふ。

四番目 畧三番

龍太鼓

無季

シテ 關清次ノ妻 狂言 從者

ワヤ

これ九州松浦の何某とてい。諸も某

召し使ひの閑の清次と申す者。他郷

の者と口論し。念あり敵を討つてい。

さうあら科人の事とてい。回宰者させ

てい。彼の者大剛の者とてい。回番の事

かたぐ申しつけをやと存ぬ。いふよ誰ら

申す者トモ

龍太鼓

ある 狂言 彼の者大剛の者よである間。

番の事がたくはやく 狂言 何と清次が卒

よう抜けたと申さか。言語道断の事。

さてこそ最前
より

さてこそ以前よりかたく申しつけて

あつた。油断はつてあつた。

彼の者の子もあつた 狂言 妻もあつた 狂言

とおつた。其女を連れて来た。

狂言 科 シカゴ 科 シカゴ 龍めらむよ。女ま

での清罪科の餘り事情あつた。

早 シカゴ 女もあつた。夫の清次。今夜卒を

命つ失せぬ。夫婦の事あつた。知らぬ

事もあつた。申さく シカゴ 女

よう賤い者あつた。我が身の助かり

とあつた。申さく。申さく。

らぬ由にしかばる程に草むらも知らん

トカへ可い由も知らぬ事である^早

ま。ま。ま。ま。ま。落居のあらん程夫の代

り。半者^{カの上}を其在處^{ツヨク}をたいてはこと

今^{地上教}の女をいかにして。今の女をいかに

て。家の半者よもまぐり。おもおもら

らぬおも入。情おも思ひはぬ殺業

の科を道れ得ぬ。報の程ぞ無慙ある^{ハシ}

何事か甲まて
トシ。▲。ナシモ

汝の女よ向ひ何事を致さど。その野者

げあるよ由つて。清次なも半より道

としてあるぞ。所詮今よりハ鼓をかいて。

一時つ一時を打つて番を仕入^{狂言}

げよや思ひらちよあひ。色ハ外もぞ見^{シカケ}

是言狂心是言狂心 又 竹 袖 したまはぬ白
 目目 入を思ふ目の流るる是言 早泊早泊

眞真 てもあひのめ 狂言狂言 あらね便やまらむ哉と
 目目 入を思ふ目 入を思ふ目

夫も行く知らで 残る身までも道
 夫も行く知らで 残る身までも道

故もあひのめ 狂言狂言 借老同借老同 一 葉と

夫も行く知らで 残る身までも道
 故もあひのめ 狂言狂言 借老同借老同 一 葉と

夫も行く知らで 残る身までも道
 故もあひのめ 狂言狂言 借老同借老同 一 葉と

夫も行く知らで 残る身までも道
 故もあひのめ 狂言狂言 借老同借老同 一 葉と

道断から復たねの一つのまちの人びをたもたんだと

夫婦ともよ助すけんのまはりさくでいさし

^{シテ}おのゝ青あものかかるる女おものかへ歸かゆを

目を見せ給たまはしめりのかみもわらしも我ら夫の心

といふもあらしのらいが私をたもたんだと

らいぞや私の柳の髪は春雨のちりり

涙なみだのちりりあものちりりのちりりと

あの鼓つづみの何の為よ懸ちらりていさと

あらしの時とき守の時ときを知る相圖の鼓つづみよ

面オモ白く一面つ異い國くよあのためにあらしあり。

^{けり一事もあらず}あらしの鼓つづみを懸ちりて時を守つらし事も

あらしの其その心こころを得てさかきの歌よ時守の打うち

まままま鼓つづみ聲こゑ聞きけり時ときのありぬ君おんの

塵ちりとも君きみらの來きんまででてかり

のうし鼓を打つては慰みなる

易か回の手はあつても打つて慰め

の鼓の聲も音もあつては

鶯の青葉の竹 湘浦のうらや

娥皇女英 練鼓をむむ此鼓

うつてもあつてもあつてもあつても

聲も時あつて鼓の聲も時あつて日

一調詠小習五
曲ノ内
仕舞獨吟ニモ

ひまな

も西山は傾けた後の室もはづら

の鼓打たれよ五つの鼓の偽の契あだ

ある妻は今のひまな離れらるる我が

ういへ忍びねのやうに打たれよ

やうに打たれよ四つの鼓の世の

中も白の鼓の中の中も白の鼓の中

根も白の鼓の中の中も白の鼓の中

物の思ひがらシテ上ニカスガウ 九つ地ニカスガウのつカのつカの便カ
 半カもあカりたカるカや。あカらカ恋カ—我カが夫カの
 面影カよカさカちカたりカ。喜カ—やカせカめカてカげカよ。
 身カがカさカらカつカよカさカつカてカこカのカ世カのカあカひカも
 ありカひカれカ。此カ卒カ出カづカるカ事カあカらカ。あカら
 此カのカ卒カや。あカらカあカらカあカらカのカ此カ卒カ！
 此カ上カのカ諏カ訪カハカ幡カもカ知カ見カあカるカ。夫カ婦カ

此カよカ助カむカぞカいカはカやカあカいカせカいカくカ。あカら
 此カよカにカおカびカぞカ。伊カ保カハカよカもカあカらカ。あカら
 夫カのカ在カ處カ。筑カ前カのカ卒カ府カよカ知カるカ入カあ
 れカ。そカあカたカ入カ行カまカてカやカらカん
 もカ隠カれカばカ申カしたカらカ。志カあカもカ今カ年カハカ我カが
 親カのカ十カ三カ年カよカ當カりカたカれカばカ科カあカりカて
 もカ助カけカ舟カのカ松カ浦カのカ川カやカ西カのカ海カ

早シテ外シテの國シテはまの極樂シテのシテ孫陀シテ誓願シテ

の誓言や科を助くる憐みのあらあり
またの清き慈悲やキリキリやごと時日を移
ささやごと時日を移ささ。かくれ一夫
を尋ねつ。本のささよ帰るあて。結ぶ
契の末久よ。松浦の川や二世の縁げよ
ありがたきささよ。ありがたきささよ

錦戸

解題

藤原秀衡の死後、遺子錦戸太郎(國衡)義隆に背少しと、神泉三郎(忠衡)に同意を求めた

謎の方便概

或士道の本義をほ組みたる現在物。シテ通して確りと推せり。ワキ中入
たる風情あり。初めのワキとの同答は兄の不義を思ひ止まらうとす。ワキは
丁寧に確りと云ふ。同答は兄の不義を思ひ止まらうとす。ワキは
りてあさましき限りに獨言の起る。一の地はの言通の事にて。ワキは
に理を言ひ聞かす心なれば、強々とならぬが宜し。二人は是に確りと云ふ。ワキは
申す。は氣をかけたさりと出で、あら何ともなを。ワキは是に確りと云ふ。ワキは
合はさすつかぬやうに心を附け、連中、手を合を。ワキは是に確りと云ふ。ワキは
かつて確りと云ひかけ、これより總して健やかに。ワキは是に確りと云ふ。ワキは
出で、一併に前より。地の地、互の薄は概弓の云はは前の氣を外さず。か、つてさりと附け、
りも手控く。地、一見と思ふな。ワキは是に確りと云ふ。ワキは是に確りと云ふ。ワキは
む、其理を聞く時はは静に降り好く。上敷、孫陀佛、云はは抜けぬやうにさりと附け、夫婦の身こそ
哀なれと悔めて心し、以下確りと云ひつけ、い、ばかを受けたりとさりと附け、物あたりによりか
かつて運ひ、落ひ止めにて。下敷、下敷を加ふる下より。ワキは是に確りと云ふ。ワキは
一法、と前へかけて確りと云ふ。追つて行く。ワキは是に確りと云ふ。ワキは是に確りと云ふ。ワキは

辭解

秀衡

藤原秀衡の裔にして陸中國西樂并平泉の領(一)孫奥御館に居り、伊澤、知賀、
る豪族。鎮守府將軍陸奥守たり。陸奥義隆を輔け、後朝の天下を統一したる後、
敬ては平一して文治三年十月(長延記には文治四年十二月とあれど誤なり)病歿せり。錦戸の太郎

秀衡の嫡子國衡(義經記には頼衡とせり)。吾妻鏡に西木戸又は西城戸に作り、西木戸有嫡男國衡家な
 と記されれば、西木戸は居住に起りたる通称にて、錦戸の字は義經記筆者の當てたる假字なり。大兵
 肥満にして弓術に長け、義經自刃後頼朝の遺討を受けて力戦せしも、文治五年八月島山重忠の部下に
 殺されたり。歌曲に泉三郎を討ちしは國衡の主唱に依るもの、如く作れど、歌曲の出所かと思はる。義
 經記には判官殿泉の御常司と一つにならせ候ひ、御内を打ち奉らんと用意にて外(中書)泰衡聞いて安から
 ることをたてけれ、それを見て兄の錦戸、ひつめの五郎、弟のともとの冠者、此こと人の上ならずと
 て、各心々になりけりけりとあり。更に吾妻鏡を見れば文治五年閏四月三十日の條に、今日、共陸奥國、泰
 衡發源興州着録、是且任勅定、且依二品仰也、豫州在氏部少輔基成朝臣衣河館、泰衡從兵數百騎、馳至
 其所合戰、興州家人等雖相防、患以敗潰、興州入持佛堂、先害妻配子一好、次自殺云、前伊豫守從五位
 下源朝臣義經改義行又義顯、年三十一と記し、更に六月二十六日の條に、興州有兵、泰衡誅其泉三
 郎忠衡等、是同日豫州(義經)之間、依有宣旨也と記せり。彼此比ぶるに、義經記には此事件
 を義經の自刃せし同年閏四月廿日より約三箇月
 前といたれども、明に約二箇月後の出来事なり。判官 經は秀衡の祖父清衡が源義家の配下に屬
 たる縁故を憑み、景に下りて其許に居り、事久しく、俱に平氏を圍らんとしてたる關係も
 ありしかば、文治三年の春春再公潛行して此地に來り、秀衡に身を寄せ居たりなり。下向 尊地
 き地に移ること。その際 秀衡卒去の際、吾妻鏡に此時の事を記して(上書)其時以前伊豫守成
 下るといふに同し。義經記にも同し。金打 昔武士の約束と違背せざる誓た、刀の刃又は鉞を打ち合せ
 事を表行して死せり。同ト場合の女は鏡を打ち合せて誓をなしたり。出仕 同條
 不覺 茂、爾自、又は武家の棟梁より出ず公事の文書、義經記にせだためて鎌倉政より、
 の書、御教書 判官を打ち奉れとの御教書下るべし、其勲功には常陸を佐ふべきとあらんずる
 宣を度々下されたること、吾妻鏡にも見えたり。參る 帰服 泰衡 秀衡の二男、義經記に、男
 衛をさす)をば嫡子には主てぬ事なりとて、當腹の二男、泰衡を嫡子に主てたる由見え、一説に國衡の
 母は直江の國の住人佐々木源三秀義の乳母にして歿しく、泰衡は後妻前氏部少輔基成の女の腹に生れ
 たるが爲なりといふ、愚管抄に、秀衡が子に母太郎父太郎とて二人ありけり、床衛は母太郎なりとい
 見えたるは、母より見たる長男、父より見たる長男の謂にて、這間の消息を語るものといふべし。京、

鎌倉よりの御教書は、こゝて泰衡に傳へられたる事も吾妻鏡に依りて明なれば、秀衡没後は泰衡が實權
 と握り居たるものと見ゆ。泰衡初め義經と討つことと踏踏せしも、後に父の遺言に背きて衣川の館を
 築ひ、首を鎌倉に送りたり。されども後幾干もなくして頼朝の積疑を受け、遺討せり。泉の三郎
 秀衡の三男、和に忠衡、泉の冠者、泉の曹司ともいふ。吾妻鏡に、三男忠衡家者在子泉屋東と見え、
 泉屋は平泉館の南に涌山寺、龍泉の傍なる館なれば、泉といふは居處に依る通称なり。一段に今中尊
 寺の西北十町餘の琵琶湖と土俗泉城といひ、もと忠衡の居處なりといへり。地域 談合 相 御分
 義經の亡び衣川に近ければ、兄と和せずなりて後此處に移りしものか。他門 源氏以外の武
 て、同ト主君に事ふると云はれりたとは無用なりとな 同心 成 順義の法は云 弟は兄に従
 り。たとといへるは引例といふ程の重き意味にあらむ。不孝の科は云 不孝の法を主從、親子、兄弟、いづれにも通し用ふるものと
 は、之に背くは順 不孝の科は云 不孝の法を主從、親子、兄弟、いづれにも通し用ふるものと
 義ならずとなり。其科の數々あるを數へて、まづ主從といひ、親子、兄弟、いづれにも通し用ふるものと
 をいひ、兄弟をいひて、法を兄弟互の口論に轉ず。親弓 論はつきたりと言ひかけ、弓の勢の窮り
 言諷道断 言法に絶 忠衡の妻のことは清書に見當らず。或に作る趣向は、義經が自刃に先
 鏡、義經記の記事に倣ひ、作者が わたり外か 居るかといふに同し。弓矢取つての 武士として
 戲曲的色彩を加へたるなり。賢人二君に仕へず 曾我物語に、賢人二君に仕へず、貞女兩夫にまみ
 源平盛衰記に弓矢取る身 不孝二君、貞女不更二夫。シテの詞、唯今母にては者の方より文を賜はりいひぬの一句の後、今本の
 不孝二君、貞女不更二夫。シテの詞、唯今母にては者の方より文を賜はりいひぬの一句の後、今本の
 人なり)が密に文を以て傳へたる原作の趣向なるを、前段と均めんとして今本の如く有きたるものなり。
 討手 進んで攻 何ともなや 何程の事か、比治つる 其處より退き、不覺を見えんも
 むる兵、あらんの意、比治つる 逃ぐること。

身法未練なる振 **刃心び** 身を陸 シテの詞「刃心び」への次、天和以前の諸本には問答「カ」上敷、クセ
 妻も二見に者らトと思ふこと、**義経**の武勲の報いらる、所なきこと等と隠れり。今本は武敏を看
 きて「げに」故は云々のツレの詞に更へたるものなるが、文の巧拙遠に運庭あり。元禄前後に於て身
 堂上の動作に重きを置き、長文の流を巧めたる際、心なき改 **けなげ** 味 **夕日の影**の云ふを
 寛を加へて全局の妙味を削きたるもの、獨曲のみならず、**腰刀** 脇 **藤波**の云 藤波を義経に、松の柄と忠衛に、虎を討
 け、夕日の傍にて面と映く、西は阿 **順逆**二列 又、逆ふ
 外院佛の浄土を樂世界のある方、**水は逆**に 水は逆ふべからざる、管子に「積使水逆流」
 衛と装はんと **二體の義** 二體一心の意、又、君臣相體といふに同トク、關係の離る
 する心を注ふ、**下知** 部下に發 **面々** 人々、今の俗流にいふ、
 か二違の去勢に迷ひての意、列は別の誤 **なかくの事** 然りといふ
 なること天加以前の諸本に於て明なり、**大太刀** 佩太刀よりも遠かに大なる太刀、
 名平記に堀の具取つて肩に打ちか **結橋**や **堀の埋草** 結橋は橋ひ合せ
 け馬の上にて云々など用例多し、**眞向** 眞正 **かけ本**流れて 斬り之みたる太刀の、事もなく斬り通つて、他側に
 の高 **持佛堂** 朝夕念持の佛像を安
 たり、**眞向** 眞正 **かけ本**流れて 斬り之みたる太刀の、事もなく斬り通つて、他側に

四番目以下
畧二二番

錦戸

無季

ツレ 泉三郎妻
シテ 泉三郎
ワキ 錦戸太郎 口巻レ 大勢

早稲
 奥州の住人秀衛が子よ。
 錦戸の太郎まてい。さても頼朝義経
 所中不和よあらせ給よより。判官殿
 親まてい者や所頼みあり。こいまで所
 下向の頼ま申の所よ。法軍の書き
 させ給よ。親まてい者空しくあり

い。ふ。の。際。も。ま。で。い。や。を。別。へ。て。衆。を。引。
衆。を。申。か。さ。る。衆。を。申。へ。て。金。持。を。申。
か。し。ま。さ。る。其。儀。律。儀。な。し。所。は。
い。ま。の。者。の。申。や。ら。し。か。ら。君。よ。り。
衆。を。申。か。さ。る。國。を。申。か。さ。る。衆。申。
か。さ。る。衆。を。申。か。さ。る。衆。を。申。か。さ。る。衆。
よ。り。力。が。及。ぶ。衆。を。申。か。さ。る。衆。を。申。か。さ。る。衆。

は。衆。を。申。か。さ。る。衆。を。申。か。さ。る。衆。を。申。か。さ。る。衆。
行。か。さ。る。程。は。泰。衡。あ。ら。し。國。を。申。
は。衆。を。申。か。さ。る。衆。を。申。か。さ。る。衆。を。申。か。さ。る。衆。
此。の。衆。を。申。か。さ。る。衆。を。申。か。さ。る。衆。を。申。か。さ。る。衆。
唯。今。泉。の。衆。を。申。か。さ。る。衆。を。申。か。さ。る。衆。を。申。か。さ。る。衆。
談。合。を。申。か。さ。る。衆。を。申。か。さ。る。衆。を。申。か。さ。る。衆。を。申。か。さ。る。衆。
誰。を。申。か。さ。る。衆。を。申。か。さ。る。衆。を。申。か。さ。る。衆。を。申。か。さ。る。衆。

一に主君よはくし事。この世にこそはくしか。
 唯、同心志給くまよ 頼朝人の
 中。即。我。君の奉。はよ。か。い。ぞ。
 其上。今。まで。頼。ま。し。申。も。い。は。よ。い。や。
 一。か。い。し。と。い。は。給。さ。し。は。い。は。い。第一。
 のたか。く。と。い。は。い。ま。い。は。い。の。身。に。い。は。い。
 一。か。い。し。と。い。は。い。ま。い。は。い。の。身。に。い。は。い。
 一。か。い。し。と。い。は。い。ま。い。は。い。の。身。に。い。は。い。

一に部の和原平

一に。恐。ら。し。身。に。於。て。い。は。い。ま。い。は。い。の。身。に。い。は。い。
 申。し。が。た。い。は。い。ま。い。は。い。の。身。に。い。は。い。
 一。か。い。し。と。い。は。い。ま。い。は。い。の。身。に。い。は。い。
 一。か。い。し。と。い。は。い。ま。い。は。い。の。身。に。い。は。い。
 一。か。い。し。と。い。は。い。ま。い。は。い。の。身。に。い。は。い。
 一。か。い。し。と。い。は。い。ま。い。は。い。の。身。に。い。は。い。
 一。か。い。し。と。い。は。い。ま。い。は。い。の。身。に。い。は。い。
 一。か。い。し。と。い。は。い。ま。い。は。い。の。身。に。い。は。い。

^{早かん上}をまゐる不孝の科ツヨクもてまゝおこなはせ
 不孝の科の數多あり。世に是の如き
 事をシテかん上承らるる君の命
 其ほく親子シテ兄弟の地上最互の論の
 概弓の互の論の概弓の力及たぬ事
 をいづるまでありや。今とせば。是と思
 ふる業あり。目人の世にあらざるなり。

座敷をまゐつて錦戸の障のほどある
 まゝ此障のほどにあらばシテ此障の語

首斷の世にあらばシテ此障の語
 こそいふ者と呼び出。此事を申し聞か
 ざるも存する。いふよあたつる事
 こそいふぞ。まづ此方へあたつる事
 我ら君の世にあらばシテ此障の語

とも我が君の使軍におよぶらむ給ひ
 たるは。何と申したる事か。申さば
 かし。我が君は對面ある事也。鐘
 泰衛無念と思ひ。又業はせ敷いなり。
 某の同の事か。さういふ。まづ業
 とも。鐘産申す。今も。頼まじ申さば
 君の事か。いかくして親の貴を替は

いかう。又取つての事か。さうい
 あり。調子白く。賢人君は仕入も。貞女
 雨夫も。まゝいふ。地下敷中。此理を聞く
 時。男女の。まゝいふ。鎌子馬の
 家。よま。いふ。主人の主君。いふ。ぞら仕入
 申さば。申さば。申さば。某の同の事か。

事。を。鐘。が。泰。衛。無。念。と。思。ひ。誰。今。討。

心... 自... 思... 腰刀を...
 夫婦の身こそ哀あり。その時腰刀を
 抜き持ちて立ちまう。あれもこれをも
 腹切らん侍身も自盡志給入。とぞ
 刀を受けけりて胸のあたりに突かれん
 てとまろくも倒れ伏せしが。泉の死
 骸も取つしおとほつたの事をぞ

後口平一セイ
尾上(数人)
ツヨク

六... 物著
 藤波の... 泉の死
 散きらん... 泉の三郎た
 かの... 水... 泉... 其身を
 順送... の境... 其身を
 矢... 恨... 思... 泉...
 腹切り給入... 何... の討...

早
あらくの事 シテ中ニ あら珍やぞぞく

申す

對面申すこと。物の具とつて肩よ掛け。
大を刀おつとつ。擗よあがり。大音揚
げて名のつやう。君臣つらハニ體の義。
君を重んじ臣子の孝行。賢人無雙
の弓取よ却つてさかくの行ハつよ。あら
腹立ちや無念やな 早 やくさかく

乗り越え
喚き出して

の向答の無益。はや討ちとれやつたも
の 地上教 下知を加つ下よりも。下知を
加つ下よりも。われもくとも面よ。
結橋や堀の埋草。はめつる乗り越え
乗り越え断崖よ寄せつけて。喚き
出して攻めたりけり シテ上 あれあら見
弟よ 矢を放さんか怒れあわども。

地拍子
ためよ捨てん命
又
たのよ捨てん命

おむ大た刀を

さうあらこれいふ。ま君のためよ捨て
ん命。何もの科ならん。惜しからぬ我が
身ありさうようて討てや入。其時
寧乎の勢。其時寧乎の勢。あれ
真先よと進みけり。泉の少りも騒
ぎして。もやよう好む。大た刀を柄長よ
おつらう延べて。多の勢が中よ割つて

金戸

九

のつらうひだりなまつり合ひつけて。
鎧を削つて戦ひけり。さうと進
めり。武者の甲の真向ちやうと打ち
まくちかま。諸勝かひきあられてかつ
さう倒してさうと伏せ。今これ
まてあつ。地。なまから毒も待つらんも
のちやうで。信。あつらまらよ。物の

AND

T

具取つてかゝらば投げ捨て日頃念
 ぜ持佛堂の体のよききりあり。
 津カケテぎよゆへ給くと腹十文カケテよま
 切りカケテ戻らうも轉カケテび落カケテちけカケテるを敵の
 つたものあり重カケテなるて信カケテづカケテまて行く
 こそ哀カケテあれ

大正十一年二月二十日印刷
 大正十一年二月二十五日發行

觀世流改訂謄本
 第四版・大正版



訂正者 丸 岡 明桂
 相續者 丸 岡 明桂
 東京市神田區今小路三十日九番地
 發行者 土居源太郎
 東京市神田區東松下町十二番地
 印刷者 鈴木彌作
 東京市神田區東松下町十二番地
 印刷所 信英堂印刷所
 東京市神田區今小路三十日九番地
 發行所 觀世流改訂本刊行會
 電話九段 二三〇五番
 振替東京 一三四七五番

1877
1877



終

